

川端康成とノーベル文学賞

— スウェーデンアカデミー所蔵の選考資料をめぐって —

大木 ひさよ

はじめに

- 1、ノーベル文学賞とは
- 2、ノーベル賞の選考システム
- 3、ノーベル文学賞選考資料
- 4、日本人を中心としたノミネート作家へのコメント
- 5、ノーベル選考委員長へのインタビュー
- 6、川端小説とその時代背景
- 7、川端の推薦者 カールヘンリー・オールソン
- 8、川端作品の翻訳家 エドワード・サイデンステッカー

終わりに

今回の論文は、受賞の翌年から50年経てば、毎年必要に応じて公開される、スウェーデンアカデミー所蔵の選考資料を参考にし「なぜ、川端康成が初の日本人受賞者となったのか」を、川端の作品やその時代背景、又当時アカデミーから推薦を受けていた他の作家と比較・検討しながら考察した。

選考資料によると、当時ノミネートボードに挙がっていた日本人作家は、現在（2014年10月）資料が閲覧出来る1963年度まででは、賀川豊彦、谷崎潤一郎、西脇順三郎、川端康成、三島由紀夫、の5名である。

川端の名が、一番最初にノミネートボードに挙がったのは1961年であるが、それから七年後の1968年に受賞した。その間に他の作家や川端康成は、アカデミーの審査員からどのような評価を受けていたのか。

様々な意見や批評がある中で、結果的に川端がどのような評価を受けて受賞に到ったかを、幾つかの視点から考察したが、公開された物の内最新資料（1963年）からアカデミーは、「日本文学の専門家」2名に日本文学に対する評価を依頼していたことが分かった。その2名とは、ドナルド・キーン教授（ニューヨーク コロンビア大学／日本語学科教授）と、エドワード・サイデンステッカー氏（三島／川端文学の翻訳者）であった。

「ノーベル文学賞」は、まだまだ一般にはその受賞理由がはっきりしないが、50年前の資料から、毎年少しずつその全容が見えてきている。

例えば、世界各国からの推薦者が、どのような理由でその作家を推薦していたか、又その時代との融合性等からいくつかの受賞理由を考察する事が出来る。

今回の論文の主旨としては、ノーベル文学賞の舞台裏を知ること、日本文学が当時（1960年代）どのような評価をヨーロッパの文学界で受けていたのか、どれほどその文学性が理解されていたのかを、探るきっかけにもなるのではないかと考えている。

はじめに

数多な文学賞の中でも、スウェーデン国が授与するアルフレッド・ノーベル氏の遺産から生まれた「ノーベル文学賞」には、毎年世界中から強い関心が向けられている。

ノーベル賞が発足してから今年（2014年）で、113年の歳月が経つ。その間、多くの国籍の作家にその栄えある賞が授与されて来た。受賞日は、彼の命日である12月10日と決められている。

しかし、その選考過程とは一体どのような仕組みになっているのか、又受賞の大きな理由とは何なのだろうか、と人々から関心と期待が寄せられている。

今回の論文では、日本人初のノーベル文学賞作家である、川端康成（1899—1972）の業績とノーベル文学賞の関連を、出来るだけ当時の資料に基づいて考察・調査していきたいと思う。

それらの資料とは、ノーベル文学賞を決定する、スウェーデン・アカデミーが所蔵しているもので、ノミネート作家や受賞理由などが記されたものであるが、これらは、受賞の翌年一月から数えて50年経った次の年に初公開されるものである。

研究の目的としては、ノーベル文学賞が授与されるにあたり、実際どのような過程を経ているのかを明らかにした上で、川端康成の文学作品の特徴等を研究しながら、他に数名挙げられていた日本人ノミネート作家と比較検討し、何故川端康成が受賞したかを、解明していくことである。

これらを、翻訳的な視点と文学的な視点の交差や社会背景、又日本とヨーロッパ社会の違いなどを考察しながら論じることとする。

1961年は、初めて川端が正式にノミネートボードに挙げた年でもあり、日本文学史の上でも、受賞の経緯を知る上で注目すべき年でもあった。しかしながら、「何故、川端康成が受賞したのか」は、現在のところ言及されていない。これは、ノーベル氏の遺言に基づき、その受賞理由を公表するのは受賞から50年後であること、との公文書があるからである。

筆者はここ数年（2010年～）スウェーデンアカデミーに赴いて、資料を閲覧する機会を与えられている。一度の閲覧で許される時間は、アカデミーからの指定により最高二時間半で、これらの資料をコピーしたり、撮影したりすることは禁止されている。当然のことながら、公開資料は全て当時のスウェーデン語で記されている。

川端康成の受賞理由が公開されるのは、2019年以降である。

よって、今回の論文ではその理由に幾つかの仮説を立てて解明していくことが狙いである。その仮説の視点とは、川端文学の分析、当時の時代背景、スウェーデンアカデミーの選考システム、選考委員のメンバー、推薦者や翻訳者の業績などからである。

1、ノーベル文学賞の選考基準の変遷

アルフレッド・ノーベル（1833—1896）は、スウェーデンの首都ストックホルムに生まれた。その後、家庭の事情などから、幼少の頃はロシアのセントペテルスブルクに移り住むなどしながら、母語のスウェーデン語を始め、数カ国語（英語、フランス語、ロシア語、ドイツ語）を習得した。自身は化学者であったが、若い頃から文学を好み、自分でも創作や幾つもの言語の翻訳を行った。

ノーベルは、「文学は人類にとって大切なものであり、ノーベル賞の中に文学を表彰の対象にすべきである」と考え、遺言の中に文学賞を入れた。

「ノーベル文学賞」とは、ノーベル賞六部門（物理学・化学・医学生理学・文学・経済・平和）の一つであり、文学の分野において理念をもって創作し、最も傑出した作品を創作した人物に授与される。

次に、そのノーベルの遺言についての文書の一部を転載する。

1895年11月27日、ノーベルは、世界で最も広く知られることになる遺言に署名した。その遺言は、衝動的な思いつきの結果ではなかった。これ以前にもいくつかの遺言が書かれていたが、この最終案にたどり着くまでの道のりは、当時の思想的・物質的な状況がいかに多難にみちていたかを示している。この遺言は、ノーベル自身と彼が出会った人々、彼が生活した環境、直面したさまざまな思いの結実であった⁽¹⁾。

又、ノーベルの遺書には次のように賞設立について述べている。

残りの換金可能な私の全財産は、次のような方法で処理されるべきものとする。私の指名する遺言執行者によって、確実な有価証券に投資された資本をもとに資金を設立し、その利子はその前年に、人類に最大の貢献をもたらした人々に対して、賞金として毎年分配されるものとする。(略) 一部文学の領域において理想主義的な傾向にあって最も優れた作品創作した者に与える⁽²⁾。

このようにして生まれた文学賞であるが、時代によって次のような受賞対象の特色が見られる。

授賞式が行われた最初の年から約10年（1901年～1912年）の文学賞受賞者は、アカデミーの定めるところによる「立派な人物像」が大きな要素であり、受賞者は文学作品への価値だけではなく、その賞に値するようなモラルと生活態度、又社会的な地位も大切であると考えられていた。

しかし、1912年頃からは、ノーベル文学賞はその文学的価値を最も大きなものとして、作家の生活や個人の趣向などは審査の対象外とし、作品自体の文学性を公平に審査基準とするように努められるようになった。

1920年代に入ると、ヒューマニズムを前提として作品を評価するようになり、1930年代には、もっと多くの人々に文学を浸透させるために、教育を受けたアカデミックな人達だけではなく、一般の人々が読んで理解・感銘出来るような作品が選ばれるようになって来た。1940年代以降になると、より先駆的な作品が注目を集め始め、文学のパイオニア的な存在が受賞作品として選ばれるようになった。

その後、50—60年代は、第二次世界大戦で失ったものを探すかの如く、「人間の真の価値」に重きをおいた作品が選ばれるようになる。

1970年代になると、一般には無名であっても文学的な価値の高い作家の作品をあえて探したり、又言語的にもこれまで受賞対象になったことのない言語で書かれた作品もその評価の対象として大きく門戸が開かれるようになって来た。

1980年代からは、ますます文学のグローバル化が進み、世界の文学の中から優れた作品を選び出す事が大切とされるようになって来ている。

「かつては、ヨーロッパ圏内、もしくはアメリカの作家が受賞者の中では多かった⁽³⁾」とされていたが、この頃から世界的な視野での文学作品の選出が広まり、現在に至っている⁽⁴⁾。

2、ノーベル賞の選考システム

選考は、約一年かけて行われている。

ノーベル賞の選考過程は、各分野とも徹底した秘密主義で行われている。あらゆる情報が選考過程中に外部に漏れないことを第一としながら、その賞にふさわしい業績や人物を選考するためである。その決定にいたるまでの議論や審査は極秘で行われている。

文学賞を選定するにあたって、毎年（9月以降）ノーベル委員会は、世界各国の作家協会の会長や、大学の文学・言語学の研究者や教授、又かつてのノーベル文学賞受賞者、スウェーデンアカデミーのメンバーなど、文学に関連して

いる世界中の人物宛に推薦状の依頼（約600—700通）を送る。その後、翌年の2月1日までに世界各国から送られてくる「推薦状」を基に、リスト（ロングリスト）を作成する。

このロングリストに挙がる候補者は、約300—350名と言われているが、作家自身が自らを推薦する事は出来ない。これは、ノーベル賞とはその功績に対して推薦があつて初めて与えられるものであり、自分から求める事は出来ない、という理由からである。しかし、同じ名前がいくつかの所から推薦されることも多く、それを考慮すると毎年、約200の名前が挙がっていると言える（推薦の有効期間は1年）。

このロングリストの中からノーベル委員会が第一選考を行い、夏まで（5月末頃）に15—20名のショートリストを作成する。これらが、最終審査に残るリストである。

これらのリストを基に、アカデミーの選考メンバーが、ノーベル文学賞を決定するための準備段階に入る。この時点で、推薦者が委員会の定めた人物（機関）からであるかなど、推薦者の名前が挙がる段階に不正がないかなどの厳重な調査が行われる。さらにこの段階で、アカデミーのメンバーが通読出来る言語（スウェーデン語もしくは英語、フランス語、ドイツ語など）にアカデミーの指定する各言語の翻訳者、または機関に依頼し、翻訳されるのである。

ノーベル委員会とは、5—6名で構成されており、数年間がその任期期間である。それに対して、アカデミーの選考メンバー（18人）は、主に作家や文学者、歴史研究者等で構成されており、特別な理由が無い限り、終身雇用制である。

このリストに挙げられた作家の作品を、アカデミーのメンバーは、最終段階での討議に向けて、9月までに作家全員の作品を読み考察を重ねる。それから、第1回目の選考会議が（9月中旬）に開かれる。

9月から10月のノーベル賞発表カンフェランス（たいてい第2週目の木曜日）までの間に数回会議が開かれて（ほぼ毎週木曜日）最終候補が絞られていく。それは、受賞発表の当日まで開かれ、アカデミー全員の投票が行われた結果を、アカデミーの書記長が統計し、同日中に世界に向けて発表することになる。

以上のような過程を経て、毎年ノーベル文学賞が1名の作家に授与されるのである。

3、ノーベル文学賞選考資料

3・1 過去の選考資料とは

毎年、ノーベル文学賞が1人の作家に授与される過程は前の章で記述したが、ここではその過程の記録である選考資料について述べる。

そもそもこれらの資料が、何故50年後に公開されるのであろうか、との疑問も起こるが、これは正式にアルフレッド・ノーベルの遺書に残っている項目なのである。

それらは、記載後50年を経過すると選考に関わった人物が生存していない可能性等もあるということから、一部の研究目的のためには閲覧が許可される。しかしながら、これらにはっきりとした目的と必要性がない場合は、許可を得ることが出来ない。

このようにして筆者は、ここ数年毎年公開資料を閲覧している。記されている内容を正確に書き写し、正しく翻訳する事は、歴史的事実を正確に伝えるために非常に大切である。

3・2 日本人を中心としたノミネート作家へのコメント

1958年 谷崎 潤一郎 (1886—1965)

コメント

「谷崎の作品は、ヨーロッパの幾つかの言語に翻訳されている事などから、作品の知名度が上がって来たうえに、現在の日本文学界の中でもリーダー的な存在である。

その中で、最も有名な作品は家族問題を取り上げた『蒔岡姉妹』だろう。戦前から戦後にかけて、谷崎は母国の日本の習慣と社会変化、例えば国際化が進みつつある日本が、日本の古い伝統をなくし始めている様子などを鋭く観察し、それを作品に反映させている。谷崎氏は、徹底的な自然主義派でありながらも心理的な側面から物事を観察している。何冊かはスウェーデン語にも翻訳された小品がある。

ここでは、日本の現実が耽美的センチメンタリズムで描かれているが、我々は彼の芸術家としての観察力を評価している。

ノーベル委員会はこのような理由から彼の推薦を認証するものの、今のところは、彼をノーベル受賞作家としてさらに上の段階まで推薦することはない。」

このコメントにある『蒔岡姉妹』とは、『細雪』のことである。本来の日本

語での題名が『細雪』であるのに、翻訳された時はそれが何故『蒔岡姉妹』に変わっていたのだろうか。この小説の内容は、蒔岡家の四姉妹について描かれているため、翻訳者（サイデステッカー訳）が、小説のポイントをさらにわかりやすくするために『蒔岡姉妹』（『The makioka sisters』1957年）にしたのではないとも考えられる。そしてこれがある意味、当時の翻訳の仕方にも関連するのではないかと考えている。

又、谷崎の作品の中で、当時スウェーデン語に翻訳された作品が、現在アカデミーの図書館に残されている。ちなみに、一番最初のスウェーデン語訳は、1955年の『⁽⁵⁾蓼喰ふ虫』である。

1958年 西脇 順三郎（1894—1982）

コメント

「ノーベル賞を受賞するだけの資料となる、翻訳された作品がなかった。（翻訳作品が手に入らなかった）」

1959年 日本人のノミネート作家なし

1960年 西脇 順三郎

コメント

「Junzaburo Nishiwaki氏は、東京大学のサンスクリット語の教授である、Naoshiro Tsuji,氏からの推薦を受けた。

この66歳の日本人の詩人である、Junzaburo Nishiwakiは、モダニズム的な作風の詩を作るパイオニア的な存在である。しかしながら、翻訳されている作品が少ないのと、彼の作品をもう少し評価するだけの資料が少ないと思われるので、今回はノミネートから外すしかない。」

西脇 順三郎の名前は、再々挙がっていたにも関わらず、毎回「翻訳作品の少なさ」の理由により、選考から外されている。当時の翻訳者の人数や質などから考えても、起こりうる事ではあるが、最近までノーベル文学賞受賞者リストに偏りがある（欧米や英語圏中心）ことが理解できると思う。

1960年 谷崎 潤一郎

コメント

「1、Junichiro Tanizaki氏は、Siwertz.氏からの推薦を受けた。」

「2、谷崎潤一郎に関しては、ヨーロッパやアメリカの作家と比べると、その作品のレベルが少し落ちるように思われる。

彼の代表作である、『蒔岡姉妹』の人物描写は悪くはないが、作品全体を考えると、その言葉使いなどが、重すぎて潤いに欠けるように思われる。

日本は現在、近代的なものを求めている、作品のテーマや物語は興味深い。しかしながらその言葉使いや表現が、それに伴っていないように思われる。⁽⁶⁾」

一九六〇年度の資料によると、西脇順三郎は最終候補には残っていなかったが、谷崎潤一郎は、最後の5人の中に入っていたことが判明した。この年のランク付けは、1、サンジョン・ペルス (Saint-john Perse)、2、アンドレ・マレー (Andre Malraux)、3、イボ・アンドリッチ (Ivo Andric)、4、ハイネリッシュ・ボール (Heinrich Böll)、そして5番目に、谷崎 潤一郎 (Juni-chiro Tanizaki) である。

これらの最終段階に残った、他の作家へのコメントと谷崎へのコメントを比べると、谷崎氏へのコメントは1つしかないので、5人の中では受賞する可能性が低かったとも考えられる。

例えば、3番のイボ・アンドリッチ (Ivo Andric) に対するコメントは、その評価が高いことが窺える。

それは、4人も審査員が彼に対するコメントをつけている。

また エストリング氏らは、この年の受賞者候補の中での特に高い可能性として (この5人の中で)、次の作家2人を挙げていた。

- 1、イボ・アンドリッチ Ivo Andric⁽⁷⁾ (1961年にノーベル賞受賞)
- 2、サン＝ジョン・ペルス Saint-John Perse⁽⁸⁾ (1960年にノーベル賞受賞)

1961年 川端 康成

コメント

「この日本人作家の作品は、心理描写と芸術描写に優れた技術が見られ、上手くそれらが表現されている。これらは、ヨーロッパの自然主義に影響を受けた彼の同時代の日本人作家数名の中でも、抜きに出ていて我々を魅了するものがある。

特に、彼の作品の中でも彼特有の表現力を持って描かれた作品は『千羽鶴』であると思う。

しかしながら、翻訳された今までの作品数が少なすぎるために、現在の状態ではノーベル賞を授与するに相応しいかどうかを決める事は出来ない。よって、

もう少し延期して考察すべきである。」

『千羽鶴』は、1959年に初めて英文で世界に発表されたが、それ以前には、『伊豆の踊子』や『雪国』が、1955年、1956年に翻訳されていた。⁽⁹⁾しかしながら、アカデミーでは『千羽鶴』に感銘を受けたとしている。これについては後で述べる。

1961年 西脇 順三郎と谷崎 潤一郎

コメント

「西脇と谷崎は、日本の作家協会から推薦を受けているが、残念ながらあまりにも彼らの作品に関する情報が少なすぎるので、今回は評価をすることが出来ない。

しかし、もし現在の資料の中から彼らの作品を評価するとすれば、今のところ賞に値するとは言えない。」

1961年に初めて、川端の名がボードに挙がったがそれ以後、他の日本人作家への興味が薄らいできているようである。

議事録最後の、全体へのコメント

「今回も、問題なく推薦者を受け取った数は、全部で56名であり、各国さまざまな作家の名が挙がっている。その内、今年初めて推薦されたのは12名である。」

川端康成は、その12名の内の1名であった。

谷崎、西脇は、1961年の段階で、3度（1958年、1960年、1961年）と議事録に名が載っていた。しかしながら、この時点では、日本人のどの作家も最終リスト五名の中には入っていない。

1962年 谷崎潤一郎と川端康成

コメント

「谷崎と川端への推薦は、委員会からの意向により、結局最終リストに載せる事は出来ない。

若い方の川端の詩的な作品スタイルは、確かにオリジナリティーがあり、芸術的な要素がある。それには、日本らしさを感じることが出来る。

一方の谷崎の作品は、『蒔岡姉妹』に見られるように、自然主義の親戚のような小説ではあるが、これは西洋文学の影響を大きく受けていると言える。『蒔岡姉妹』をはじめ、彼の作品は、往々にして西洋文学の影響を強く受けて

いる自然主義小説である。」

川端の描く「日本らしさ」に対して、谷崎が描いた世界を、「西洋文学からの影響」と解釈されていたことは興味深い。これらのコメントから、川端の日本描写は審査員を強く惹きつけていたと言える。又、通常アカデミーのボードに挙がってから、受賞までは数年、時には数十年かかると思われる。

1962年 西脇 順三郎

コメント

「日本人作家、西脇の近代的な詩は、このノーベルアカデミーの水準に達しているとは思えない。」

1962年西脇順三郎へのコメント

(デンマークのペンクラブとエービンド・ヨンソン Eyvind Jonsson 氏からの推薦)

委員会会長である、アンダッシュ・エストリング氏 (Anders ?sterling) は、スタインベックについて、次のように述べている。

コメント

「スタインベックは、長い間アメリカ文学界の中心的な存在であったが、ここ最近少しその地位を疑問視されていた。しかし、最新作の『The winter of our discontent』で、再びその地位を取り戻した。

ニューイングランド (アメリカのある地域) にある、海岸沿いのある町が小説の舞台になっているこの小説の作品の中で、彼の名前を有名にした『Grapes of wrath』と同様に、社会に対して鋭い視線と思いやりの心を持って、自分の主張を率直に述べたとも言える。

この作家は、Sinclair Lewis や Ernest Hemingway と同等の、リアリズム作家とも言える。」

このコメントで興味深いのは、アカデミーが評価したのはスタインベックの作品の中でも特に有名な『怒りの葡萄』ではなく、『われらが不満の冬』であり、それが文学賞を取る大きなきっかけとなったことである。

1963年 川端 康成

コメント

「今年は、四人日本人作家の候補者がいるが、彼らの作品を十分に考察できる、こちらの判断材料となる資料／知識が欠けている。又、この四人の中で、特に

川端の作品が一番評価出来るとも現時点では言えないので、今年は川端をこれ以上推薦することは出来ない。」

1963年 西脇 順三郎

コメント

「ドナルド・キーン教授からの意見に従い、西脇をこれ以上推薦しないことにした。」

このコメントにあるように、アカデミーは、ドナルド・キーン教授（1922～）の意見に従って、推薦基準を決めていることが解った。今回の、資料閲覧（2014年1月、現時点）で一番大きな収穫となったのは、アカデミーが、日本文学についての専門家を2名決めて、その専門家からの意見を重視していたことが分かった点である。これは、1963年度の資料を注意深く読み進めてくうちに、判明した。

その専門家2名とは、ドナルド・キーン教授（ニューヨーク コロンビア大学／日本語学科教授）と、エドワード・サイディンステッカー氏（三島／川端文学の翻訳者）である。

この、2名の専門家によるコメント資料も、今回アカデミー側から閲覧許可を与えられたが、今回の論文では時間的な問題で、それらを十分に考察することが出来なかった。

しかし、これらは今後筆者がノーベル文学賞を研究するにあたっては、貴重な資料となる。

1963年 谷崎 潤一郎

コメント

「今まで一度も、日本人作家に賞を授与したことがないので、是非とも日本文学者に賞を与えたいと思っている。」

多くの日本人は、谷崎を日本文学界の中心的な存在であると考えているようであるが、我々はそれに反して彼の作品はまだ賞を得れるほどのレベルに達しているとは思っていない。」

1963年 三島 由紀夫（1925—1970）

コメント

「専門家からの意見である、『三島には将来性がある』という事を考慮すべき

であると思う。

一番最近英訳された作品の『宴のあと』を読むと、彼の技術的な才能を認識させるには十分である。しかし、その作品からは、どちらかと言うと文学性よりもジャーナリスト性が感じ取れる。又、この最新作によって、彼の業績をさらに押し上げた、とも思えない。

とにかく、今後もこの作家の作品をもっと追跡する必要がある。なぜなら、この四人の日本人作家の中では、三島がノーベル賞を取る可能性が一番高いと思われるからである。」(エステリング委員長から)

1963年の時点では、三島がノーベル賞を取る可能性が大きいと書かれていたが、結果的には川端が、三島の在命中である1968年に受賞した。この主な理由は何であったのか、の疑問が残る。その上に、『宴のあと』の翻訳者が、委員会が定めた日本文学専門家の一人であるドナルド・キーンであったことも、興味深い。

4、ノーベル選考委員長へのインタビュー

ノーベル文学賞を決定する、中心的人物の内の一人である、ペール・オストベリー氏を2011年と2012年の10月に自宅訪問し、川端康成の受賞についてのインタビューを行った。オストベリー氏は、川端がノーベル賞を受賞した頃は、まだ現在の職に就いていなかったが、当時の状況を少しでも収集するのが目的でもあった。

ここに、ペール・オストベリー (Per Östberg) 氏の経歴を参考までに記述する。

1933年、ストックホルム生まれ。15歳の頃から作家活動を始め、20歳の頃から、スウェーデンの代表的な新聞の一つである、ダーゲンス・ニーヒッテル紙の文化欄に積極的に投稿するようになる。しかし同時期に、アメリカのハーバード大学で学んでいたため、投稿はアメリカからしていたことになる。1955年には、同大学で学位を取り、その後スウェーデンの大学でも学位を取り、1964年からはスウェーデンペンクラブの会長になり、同年には、アムネスティ・インターナショナルのスウェーデン支部を発足する。

60年代にはアフリカに渡り、アパルトヘイト問題やその社会についてルポタージュしながら、幾つかの作品を書き上げた。

このように、広く国際的な活動が見られるが、1976年～1982年にかけては、インターナショナルペンクラブの会長も務めるなど、文学の分野では世界的に

も有名になっていた。その頃は、以前投稿していた新聞社の文化欄のチーフ記者を勤めていたが、1997年からはスウェーデンアカデミー（18人のうちの1人）の一員となり、1998年からはノーベル委員会（ノーベル賞最終選考委員）のメンバーとなった。又、2005年からはノーベル委員会の会長職を得て、現在に至る。

次に、オストベリ氏へのインタビューの一部を記載する。

筆者：まず、川端が正式に推薦を受けて、議事録のボードに載ったのが1961年ですが、受賞したのはそれから7年後の1968年になります。この7年間の待ち期間というのは、長いのでしょうか、それとも短いのでしょうか。

オストベリ：推薦から7年後の受賞は、ごく普通です。短くもないし、長くもないです。まず、推薦から2年経って、初めて審議のボードに載せる事が出来ませんが、賞を授与するまでには、色々な角度からの考察が必要です。

筆者：何か当時の事で覚えている事や、川端の作品について感じる事を話して下さい。

オストベリ：川端の作品から、日本の伝統美や美しい景色、又風習などを知ることが出来ました。同時に川端独自の描写表現が素晴らしいと思いました。1961年当時の審議の参考資料になったのは、『千羽鶴』等ですが、これは1959年にはじめて英訳されたものであると思います。

この折、オストベリ氏は、「自分としては、もし生存しているのであればノーベル文学賞に近かったのは、むしろ「安部公房」(1924—1993)ではなかったかと思います」とも、述べた。

このオストベリ氏との会談を終えてから、選考資料やノーベル文学賞について書かれた書物等を考察していくうちに、ある一つのことが考え出された。それは川端康成が、何故他の日本人作家より先に、初のノーベル文学賞を取る事が出来たのか、また当時まだある意味では未知の領域の一つであった日本人作家の中から彼が選ばれた主な理由は何であったのか、などである。これについては、後の章で、さらに詳しく川端の仕事やそれに関わる人物等を重ね合せ

て、結論として導き出したいと思う。

5、川端小説とその時代背景

川端康成の小説が、初めて翻訳されて世に出たのは、『伊豆の踊子』⁽¹⁰⁾である。早い段階での川端文学の代表作の翻訳は、下記の通りである。

1942年 『伊豆の踊子』ドイツ語訳（オスカー・ベンル訳）

1955年 『伊豆の踊子』英訳（エドワード・サイデンステッカー訳）

1956年 『雪国』英訳（エドワード・サイデンステッカー訳）

1959年 『千羽鶴』英訳（エドワード・サイデンステッカー訳、その後まもなく、ドイツ語とフランス語にも訳された）

先に触れたように、アカデミーのメンバーが取り上げていたのは『千羽鶴』である。

では何故『伊豆の踊子』や『雪国』ではなかったのか。

これらを考察してみると、外国から見た日本の文化・日常生活への興味と関心ではないかと思う。日本のイメージが長い間「富士山・芸者」であったことは、周知のことである。

しかし、この「富士山・芸者」は、日本のシンボルの一つであっても、日常の生活や一般市民の生活ではない。

川端康成が、『伊豆の踊子』(The Dancing Girl of Izu) や『雪国』(Snow Country) を執筆した1930—1940年代というのは、日本にとっても画期的な時期であり、東京がアジア初のオリンピック開催地になるように、日本が積極的に世界に働きかけるなど、近代国家として名を馳せている真最中でもあった（実際その後、東京オリンピックが当地で開かれたのは、1964年である）。

しかし、女性が客をもてなす方法の一つとしての「芸者」が主人公の一人である『伊豆の踊子』や『雪国』よりも、一般市民の生活の中から題材を集めた『千羽鶴』が、より海外から眺めた日本として、その文化と生活を象徴していたのではないか、と思う。

日本人の生活の中にある文化、茶道や花道、書の掛け軸や焼き物の茶碗、それに日常着としての和服など、異国からそれらを眺めた時、自国とは大きく違う生活風習が、日本の日常でありながら、また同時に、世界各国共通の精神的な恋愛における葛藤や悩みなどが小説の中では取り上げられている。それらを考えると、特殊な仕事の一つである「芸者」⁽¹¹⁾を扱った作品よりも、茶道を日常の文化として嗜み、そのような日本文化と日本の生活を描いた作品が、より

「日本らしさ」として、新鮮に受け止められたのではないかと、考えられる。

又、本論の一番最初の章で取り上げた、「ノーベル文学賞」の審査基準も、年代によって変化している。先述にもあるように、第二次世界大戦で失ったものを探すかの如く、「人間の真の価値」に重きをおいた作品を推す傾向とも関連しているのではないかと思う。

1930年代以降は、ごく一般の人でもその文学を楽しみ、共感出来るような作品が多く取り上げられるようになった。そう言った意味でも、「ノーベル文学賞」は市民の生活から生まれる、社会性や生活が基になっているのかも知れない。

六、川端康成の推薦者（一九六一年）カール・ヘンリー・オールソン

ノーベル文学賞を受賞するにあたって、必ず推薦者が必要である事は先にも述べたが、「誰から」の、もしくは「どこから」の推薦であるかもある程度重要ではないかと思っている。それは文学賞だけではなく、ノーベル賞全体にも言える事であるが、推薦文がスウェーデン語や英語など欧米の言語であることは、アジアやアフリカ等の学者には、若干不利なようにも思われる。

次に、川端の推薦者が、ストックホルム大学の教授で、アカデミーの選考委員の一員であった、カール・ヘンリー・オールソン氏であったことはどのようなことを意味するのか、について考察する。

ここに、カール・ヘンリー・オールソン氏 (Karl Henry Olsson) の略歴を参考までに記述する。1896年、スウェーデンの南西に位置するバルムランドで生まれた。氏は、作家、文学研究者（文学博士）であり、同時に言語研究にも従事していた。1945年から1961年までは、ストックホルム大学の文学史の教授を務めたが、その間の、1952年から1985年までは、スウェーデンアカデミーの一員となり、1960年から1971年まで、ノーベル委員会の一員でもあった。1985年、没。

原則として、スウェーデンアカデミーの一員に選任されると、その任務は特別な理由がない限り終身雇用制になっている、と先にも述べたが、アカデミーの18席は、一人の委員が欠けると、次に選ばれた人が就くシステムである。

この年譜から、川端がオールソン氏からの推薦を受けた1961年は、アカデミーの一員でありながら、ノーベル委員会の一員でもあったわけである。それらを考慮すると、川端の推薦者が、選考に関れる立場であると言う意味から、かなり身近な人物であったことになるが、このオールソン氏と川端の間には特別

な交流は無かった（ペール・オストベリ氏に確認済み）

川端への推薦は、現在閲覧出来る限りでは、1961、1962年と1963年（日本ペンクラブから）であるが、初めての推薦者がオールソン氏であったことは、有利であったのではと思われる。

又、1962年の推薦団体は「日本ペンクラブ⁽¹²⁾」で、現在のノーベル委員会の会長であるオストベリ氏も長い間、スウェーデンペンクラブと国際ペンクラブの会長を務めていた。川端の推薦団体が日本ペンクラブであったと言う事は、日本の作家を世界の舞台に押し上げるためでもあったのか、結果的に川端は、日本ペンクラブと国際ペンクラブの交流などを考慮すると、日本からとスウェーデン国内から両方の、推薦を受けていたことになる。

七、川端作品の翻訳家 エドワード・サイデンステッカー（Edward George Seidensticker February 11, 1921 - August 26, 2007）とその仕事

川端康成は、ノーベル賞を取った後に「自分の受賞は、翻訳者のエドワード・サイデンステッカー氏の業績が大きい」と語っている。この発言から、翻訳者と作家の間には深い信頼関係があった、と言ってよいと思う。1960年代頃までは限られた翻訳本しか市場に出ていなかったの（55頁）参照、その翻訳の巧拙が大きく作品の価値を決めていたであろうことは確かである。

しかし、何を以って上手い翻訳と、そうでない翻訳の差が生じるのであろうか。

川端の受賞と同時に、世に名を知られることになったこの翻訳家は、日本通であり、下町情緒を愛した文化通でもあった。もちろん、それらは川端文学を訳す上で大切な事であり、日本を知らない学者が言語だけで日本文学を翻訳することは、不可能であると思うが、その反面、サイデンステッカー氏の本来持っていた欧米感覚が媒体となり、川端の言葉を、時には微妙に変化させていたようにも思えるのである。

日本語文を英訳もしくは、他の国の言葉に訳す場合は、翻訳者自身がどれほどその作品なり文章を理解しているか、の度合いにも係わってくると思うが、他国の言語に訳す場合は、翻訳者の本来持っている感覚や、常識がどうしてもその言葉の隅々にでてくるのではないかと考えているのである。次に、その例を挙げてみる。

日本語（『千羽鶴』森の夕日、81～）

「菊治さんおいくつ？」菊治は答えなかった。「三十前でしょう？ 悪いわねえ。悲しい女だわ。私には分かりませんわ。」夫人は片手を突いて半ば起き、足を折りかがめた。

英語訳 (『*Thousand Cranes*』 Translated by Edward G. Seidensticker, 1959, New York) P63-64 “How old are you?” Kikuji did not answer. “Still in your twenties? It, wrong. I’m very unhappy. I don,t understand myself.” Pressing one hand to the floor, she half pushed herself up.

この箇所は、太田夫人が死亡する前日に菊治と夫人との間に交わされた、重要な文章であると思う。しかしこの中の、次の英訳文を読むと、日本語と英語訳の間に若干のニュアンスの違いが生じていると思う。

「三十前でしょう？悪いわねえ。悲しい女だわ。私には分かりませんわ。」これはまだ三十前の、自分に比べて若い菊治と深い関係（非現実的な＝汚れた、とも解釈できる）に陥った自分を卑下して、「悪いわねえ。」とつぶやいているように読める。又、次の「悲しい女だわ。」では、理性に打ち勝てず愛欲に溺れてしまった自分に対して、自分自身の弱さを悲しんでいるように理解出来る。その後続く「私には分かりませんわ。」では、何故かつて菊治の父の愛人であった自分が、年齢を省みずこのような関係を結んでしまうのか、自分自身が理解できない。やはりこれも己を懺悔する気持ちの表れであると思う。しかし英訳を読むと、It, wrong と訳されており、それは菊治が自分よりもずっと若いのにこのような関係が出来たこと自体が悪であり、そこには共同責任の背徳が感じられる。

次に、I’m very unhappy を簡単に訳してしまうと「私はとても不幸だわ。」ということになり、自己を悲観しているが、卑下しているようには伝わらない。

しかし、「悲しい女だわ。」をスウェーデン語で訳すと、Jag är en sorglig kvinna となり、それを英語に直訳すると、“I’m a sad woman” となるのではないだろうか。

このように、「不幸」である事と、「悲しい」という事には若干の違いがあると思われる。

この文の最後の I don,t understand myself.” に関しては、日本語同様に自分で自分が理解できない、というように読める。

Still in your twenties? It,wrong. I’m very unhappy. I don,t understand myself.

しかしこの、“Still in your twenties?” の部分を和訳すると、「まだ20代でしょ？」となるが、『千羽鶴』の中では、「30前でしょう？」と、書いてある。30

前と言うのは、20代後半を指し、20代というのは20～29歳までのことである。このように読み進めていくと、翻訳者自身の持つ文化・風習やその作品の書かれた時代背景が微妙に関わって来るように考えられるし、これらの幾つかのニュアンスの違いは、当時の日本と欧米社会のモラルや常識の違いにも辿りつくと思う。

仮説ではあるが、サイデンステッカー氏の翻訳が川端作品にとって有利であったのは、彼の欧米感覚と深い日本文化と言語の知識が上手く混ざり合って、当時のスウェーデン人にとってもある程度わかりやすく、川端文学を理解する事が出来たのではないかと考えている。

終わりに

これまでの各章で、ノーベル文学賞についてやその背景、又川端作品に関わった人々やそれらの業績等を通して、この論文のテーマである「何故、川端康成が他の日本人作家に先駆けて、ノーベル文学賞を受賞したか」を分析しながら研究した。

川端康成の作品は、「言葉の芸術」と表されており、「med fin känslighet uttrycker japansk väsen i dess egenart (繊細な感覚で、日本人の本質を表現している)」と、ノーベル委員会から賛辞を受けていた。

ノーベル委員会も、1960年代に入ると、西洋文学以外の、彼らにとっては未知の文学であるアジアやアフリカ等の作家にも積極的に目を向けてはいたが、まだまだ委員会の考える「ノーベル文学賞」に達する作品を挙げるのは困難だと思っていたようではある。

しかしながら川端康成の作品に関しては、先述したように、その作品の芸術性を高く評価していたようだ。

“Litteraturpriset 文学賞”によると、「他国の文学を深く理解するには、その国の文化・風習も知っていなければいけない。その点、川端の作品からは日本の文化をよく理解する事が出来たし、共感できるものがあった⁽¹³⁾」と述べられている。

川端康成自身も、日本の情緒を大切にしており、自ら日本の美しさや文化の大切さを世界にアピールするかのごとくに、ノーベル授賞式には燕尾服ではなく羽織袴で臨み、記者団の前では得意の毛筆で何かを筆記するなど、立ち居振る舞い全てにおいて、日本人の文化と慎ましさ、を表現していた。

四、で記したように、筆者は現在のノーベル委員長には、二回個別の取材訪

問をしている。その時に、委員長がまだ若い頃、川端氏がストックホルムに来た際にインタビューをした時の印象を語ってもらった。オストベリ氏によると、川端康成は「非常に奥ゆかしくて、シャイな人」という印象が強かったが、同時に親切でフレンドリーでもあったようだ。

オストベリ氏は、1969年に川端の京都の家に招待を受けるなど、受賞後に交流があった一面も窺えるようである。

当時のヨーロッパ社会において、初の日本人ノーベル賞作家が、日本の代表のような感覚を持たれたことは想像に難くない。同時に、日本の文化が当時から現在に至るまでも「東洋の美しさ」として賛美されていることは間違いない。

今回の論文を執筆するにあたって、過去に集めた資料が非常に貴重なものであった事は言うまでもないが、特にノーベル財団所蔵の資料から「何故、川端康成が初の日本人ノーベル賞作家であったのか」のヒントが読み取れた。

例えば、1963年までにノミネートボードに挙がった最多の日本人作家は、谷崎潤一郎の5回である。当時、『蒔岡姉妹』（『細雪』）については、その構成の斬新さや面白さが評価されており、「新しい日本」として、興味を持たれていた。

しかし先にも述べたが、1961年に川端康成が初めてオールソン氏に推薦を受けてからは、急にその色彩を欠いたかのようで、1962年のコメントには、「若い方の川端の詩的な作品スタイルは、確かにオリジナリティーがあり、芸術的な要素がある。それには、日本らしさを感じる事が出来る。それに対して、一方の谷崎の作品は、『蒔岡姉妹』に見られるように、自然主義の親戚のような小説ではあるが、これは西洋文学の影響を大きく受けていると言える。『蒔岡姉妹』をはじめ、彼の作品は往々にして西洋文学の影響を強く受けている自然主義的小説である。」とある。

つまり、ノーベル委員会は日本らしさや日本の情緒が文学として表現されている、川端の作品に「時代の新鮮さ」を感じたのではないかと考えている。逆に、谷崎潤一郎などの耽美派が、西洋文学の影響を受けた文学だと捉えられていたとすると、当時彼らが求めていた日本的な情緒にどこか欠けていたと言うことになる。

川端はしきりに、サイデンステッカー氏の翻訳の上手さを、インタビュー等の中でもたたえていた。先にも触れたように、サイデンステッカー氏の川端作品の翻訳者としての長所とは、日本文学・日本社会への精通している事と、同時に氏が持っている欧米感覚のフィルターを通して非常に上手く翻訳されてい

た点であり、そこがノーベル委員会のメンバーには、遠く離れた未知のオリエンタル情緒を感じながらも、ヨーロッパ人の彼らが理解できる日本社会と文化であったのではないか。

もちろん、翻訳の基となる川端作品の中には「美しい日本」が存分に描かれている。

これらをまとめて考察すると、何故川端康成が、日本人初のノーベル文学賞を受賞したかと言うと、西洋から観察していた日本の文化や情緒がよく解り、尚且つそこには「美学的要素」が感じられ共感することが出来た。その上、川端自身が語るように、それらを助ける翻訳の力も大きい。

次に大きなことは、「時代との調和」である。1945年に第二次世界大戦が終わり、世界各地では自国の復興と同時に他国への関心が強まっていた時期である。様々な意味合いでの「ナショナリズム」が、1950年～1960年代に向かって文学や芸術の世界でも発展していったのではないか。

2000年に開かれた国際会議「20世紀におけるナショナリズム、スポーツ、身体文化」から『戦時期日本文学とナショナリズム、メイデン・ドリーム』**Charles R. Cabell (Department of Foreign Languages and Literatures, Univ. of Montana, United States of America)** から一文を取り出すと、「1968年、川端康成(1899—1972)がノーベル文学賞を受賞した頃、彼の作品は、近代国家としての日本の台頭を象徴していた。川端の繊細で美しい散文表現は、西側連合軍が利用した戦時期の狂気じみた残忍なアジアにおける敵、つまり非人間化された日本のイメージをかき消すのに役立った。(略)川端は、伝統と近代を同時に体現するハイブリッド(雑種混血的)な女性を描き出し、日本と西洋と、そして、他のアジア⁽¹⁴⁾と区別するのである。」とある。

このように、川端の作品の中には、「美しい伝統的な日本」と、太田夫人のように一人の女性の中に、相手を立てて自らをへりくだるような慎ましさと、欲しいものは欲しいと、自分の欲望を時には優先させるような、大胆な「新しいタイプの日本人(女性)」が同居している。

それらは川端独自の世界でありながら、外から見ると伝統を守りながら新しい何かを求めていた日本と一致したのではないだろうか。そして、そこにノーベル委員会は「新しい日本」を感じ取り、高く評価したのではないかと思えるのである。

そういった視点から川端作品を考察すると、伝統と近代化を持ち合わせた川端文学は、世界が次の世代に求めていたものであり、それがアジア初の「ノー

ベル文学賞」へと繋がったのだと思う。

古いものや伝統が、時には時代を背負う新しさに変化することがある。川端の作品を海外の視線から捉えた時、伝統や文化の枠組みの中にながらも、少しずつ変化している日本人に新しい日本を感じ取り、尚且つその調和に美学があったのではないかと思う。

ノーベル文学賞とは、作品の素晴らしさや作家の知名度、人気だけではなく、グローバルな視野から「今、世界は何を求めているのだろうか」との問いに応えるような作品や作家が、受賞の対象になっている、との結論が、ここ数年リサーチを行った結果として得られた。

又、「文学賞や平和賞、経済学賞が政治と関連して語られることが多いです。」、湯川秀樹の受賞は原爆投下に対する反省、川端の受賞は東京裁判に対する西欧諸国の謝罪、の意味が込められているという分析⁽¹⁵⁾に対しては、そこまで具体的に政治と結びついた結果が、ノーベル文学賞に及ぼしているとは言いがたいし、受賞が「東京裁判に対する西欧諸国の謝罪」と考えるのであれば、川端でなくて他の日本人作家であってもよかったことになる。委員会は、あくまでも文学的な視点からのグローバル性を重視しているのではないかと思う。

しかしながら、当然自然な形で世界の動きにも焦点を合わせて作品を解説・審査されていると思うので、毎年世界中で注目されているように「次のノーベル文学賞作家は誰だ」との問いには、「世界の動向に合わせた文学の流れ」を考察してみることも出来るのではないだろうか。

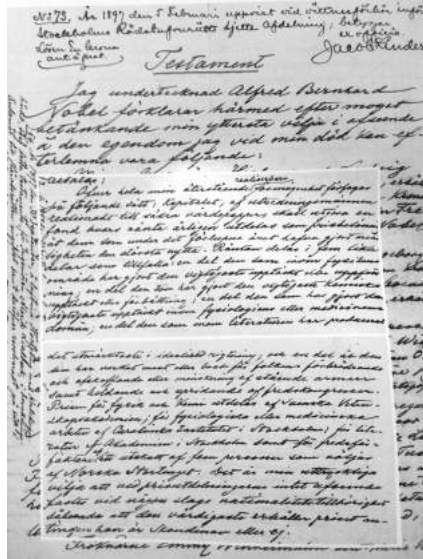
付記

三島文学の翻訳者であった、ドナルド・キーンが当時の日本文学専門家であったことは非常に興味深い。しかし何故、ドナルド・キーンは三島ではなく川端を強く支持したのか、を今後の研究の一つに加えたい。

次回閲覧は、2015年1月を予定してあるが、この時点で1964年度の資料を読むことが出来る。

注

- (1) Människor, miljöer och kreativet: Nobelpriset 100 år (2001, Ätlantis) の日本語訳版より引用。『ノーベル賞の百年 創造性の素顔』2002年3月。
- (2) 同右。遺書のコピー・遺書の中で、ノーベル賞の設立について述べた部分から一部抜粋)



(3) 1980年代に入るまでの、ノーベル文学賞受賞者総数は76名であるが、その内圧倒的に多いのが、ヨーロッパ圏内の57名であり、次いで国として多いのがアメリカの8名である。

(4) 参考資料『Nobelpriset i Litteratur』Svenska Akademien 2006

(5) 1955年の『蓼喰ふ虫』ニールス・スベンソン訳

(6) 資料・原文の抜粋—スウェーデン語

Vad angår japanen Junichiro Tanizaki har jag inte kunnat övertyga mig om att hans författarskap fyller de mått, som här måste gälla i jämbredd med hans europeiska och amerikanska medtävlare. Hans mest representativa roman, "Systrarna Makioka" har givna förtjänster i typskildringen, men lider av viss tyngd och torrhet, som gör att det fångslande stoffet från Japans moderna brytningstid inte kommer till sin rätt.

(7) イボ・アンドリッチ (1892—1975年) ユーゴスラビアのボスニア生まれの作家。社会性のある作品を発表し、「自国の歴史の主題と運命を叙述し得た彼の叙事詩的力量にたいして」1961年にノーベル文学賞を授与されている。

(8) サン＝ジョン・ペルス (1887—1975) フランスの詩人、外交官。スウェーデン人のノーベル平和賞受賞者である、ダグ ヤルマル アグネ カール・ハンマルショールドからの推薦により、1960年にノーベル文学賞を授与されている。

(9) 『千羽鶴』(1959年)、『伊豆の踊子』(1955年)、『雪国』(1956年)は、全てエドワード・サイデンステッカーにより翻訳されていた。

(10) 1942年のドイツ語訳 (オスカー・ベンル訳) である。

(11) 「遊女」と「芸者」の違い。芸者とは、「お座敷で踊りを舞ったり、三味線を弾いた

り、お酌をしたり客の話し相手になったりと、芸を披露しながらの接客業」である。それに対して、「遊女」とは、「お酌だけではなく、条件次第では性的な相手になることもあった。」しかし、この遊女と呼ばれる職業は、江戸時代までで、それ以降は基本的にはないが、江戸時代には、「遊女」も「芸者」も両方いた。これらを考慮した時、海外から見た「芸者と遊女」の違いを理解しているかは、疑問である。

- (12) 「日本ペンクラブ」<http://www.japanpen.or.jp/>
- (13) Kjell Espmark, 2000, Norstedts Förlag
- (14) この中で「他のアジア」とは、一般的な「東南アジア諸国」や同じ東アジアでも、韓国、朝鮮、中国を意味し、その中で、この時代には日本が一番近代化の進んだ「アジアの国」であったと解釈できる。
- (15) 伊東 乾『日本にノーベル賞が来る理由』2008、朝日新聞出版社